

[成果情報名] 無側枝性夏秋ギク「岩の白扇」の親株養成技術

[要約] 7～9月を出荷期とする夏秋ギク「岩の白扇」の電照抑制作型の親株養成方法は、2月上旬に最低夜温 12℃とした温室内に植え付け、親株の電照は4月上旬に開始し、深夜4時間の光中断とすることで3月から連続的に挿し穂を生産できる。草丈伸長の劣る6月定植作型では定植（挿し木）の3～4週間前に採穂する。

[キーワード] 無側枝性ギク、夏秋ギク、親株、光中断

[担当] 香川農試・小豆分場

[連絡先] 0879-75-0033

[区分] 近畿中国四国農業・花き

[分類] 技術・普及

[背景・ねらい]

「岩の白扇」は、これまで栽培されていた白色系輪ギク「精雲」に代わって栽培が増加しているが、定植時期が遅い作型では、節間が短くなり草丈の伸長が劣る。親株の養成条件は、定植後の生育に影響を及ぼすことから、親株から連続的に挿し穂を採取する苗生産において、定植後の伸長性が高い苗を生産するための親株養成方法を確立する。

[成果の内容・特徴]

1. 親株養成時の最低夜温は 12℃および無加温区で苗の定植後の伸長が良く、収量性も高い(表1)。
2. 親株の加温開始時期が遅いほど苗の定植後の伸長性が高いが、加温開始が3月以降の場合は、3月期の採穂本数が少ない(表2)。
3. 親株の花芽分化抑制のための長日処理は4月から開始し、深夜4時間の光中断処理とすることで、定植後の早期発蕾が防止できる(表3)。
4. 5～6月定植作型では、3～4週間前に採取した穂を用いることで、茎長が長くなる(図1)。

[成果の活用面・留意点]

1. 苗生産は気象条件が試験地と著しく異なる海外等で行われる場合があるので、これらについては別途苗の品質(生産性)を検査する必要がある。
2. 購入苗は、生産された条件や採穂時期をあらかじめ確認した上で、栽培に臨む必要がある。
3. この成果は直接挿し栽培で行ったものである。

[具体的データ]

表1 親株養成時の夜温が定植後の生育に及ぼす影響

区	摘心後の 萌芽数 本/株	電照終了 時の茎長 cm	開花日 月/日	切花長 cm	切花調整重 g	節数	収量 本/株
無加温	4.0	49	8/15	88	50±12	46	1.7
12℃	3.1	48	8/16	86	53±16	46	1.7
15℃	3.0	42	8/19	81	40±13	43	0.9

親株の植付け(処理開始日)2000年1月19日。採穂:4月13日。定植:5月1日(直接挿し栽培)。摘心:5月14日。電照終了:6月27日。

±以下の数値は標準偏差(無加温区N=40、12℃区N=38、15℃区N=34)。

表2 親株の加温電照開始時期が挿し穂の生産本数と定植後の生育開花に及ぼす影響

親株の加温 電照開始日	月別採穂本数(本/株)			8月出し作型における生育開花及び収量					
	3月	4月	5月	摘心後の 萌芽数 本/株	電照終了 時の茎長 cm	開花日 月/日	切花長 cm	節数	収量 本/株
1999/12/9	6.8	4.4	7.5	3.4	41	8/16	78	45	2.3
1999/12/24	6.7	4.8	9.6	4.0	44	8/15	81	46	2.8
2000/1/15	6.5	5.5	10.9	3.8	43	8/19	80	45	2.4
2000/2/4	5.8	7	11	3.8	48	8/16	85	46	2.5
2000/3/3	1.4	6.6	10.4	4.0	51	8/15	88	47	2.6
2000/4/5	0	6.2	10.6	4.3	52	8/14	91	47	2.6

親株養成夜温:12℃。採穂:2000年4月13日。定植:5月1日(直接挿し栽培)。摘心:5月14日。電照終了:6月27日。

表3 親株の養成夜温と長日処理方法が定植後の早期発蕾率に及ぼす影響

親株の養 成夜温	光中断電照時間(hr.)		開花節数	早期発 蕾率 %
	4/10まで	4/10以降		
5℃	4	4	48±3	0
	4	2	49±4	42
	無	4	48±4	0
	無	2	48±6	31
12℃	4	4	48±2	0
	4	2	53±3	63
	無	4	48±2	0
	無	2	48±2	67

親株の処理開始日:2001年3月6日。採穂:5月7日。定植:6月1日(直接挿し栽培)。電照終了:7月19日。調査株数12株/区。開花節数は早期発蕾株以外で調査。

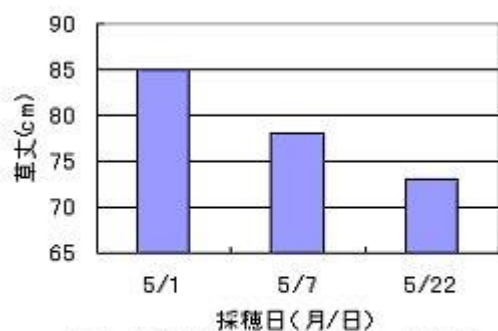


図1 採穂日が開花時の草丈に及ぼす影響

親株養成夜温:12℃。定植(直接挿し):2001年6月1日。
挿し穂は定植まで5±2℃で貯蔵。

[その他]

研究課題名 : 21世紀に向けた特産キクの新省力栽培技術体系の確立

予算区分 : 県単

研究期間 : 1997~2001年度

研究担当者 : 松本由利子、藤村俊夫、十川和士

発表論文等 : なし